

5. 最後に、最近オハヨウ大学、イリノイス大学等において、図書館協会が行った大学図書館についての研究文献表が記載されている。

わが国の新制大学制度は、戦後米国から輸入されたものである。その大学の現在の内容は、一部のものを除いて、米国の大学のそれとは驚くべきへだたりがある。その一面が、この図書館の使用にあらわれているといっても過言でない。無思慮に何もかも米国の大学に追従することは要らないが、大学の本質を考えると、学ぶべき多くのものがある。中央政府の最近の統計に依ると世界の150ヶ国から92,000人の学生が、1,800の米国の大学及び大学院に学び、毎年20,000人が卒業して各自の母国に帰って行く由。その中で55%が極東諸国からであり、12%が欧州各国からだという。今や、米国の大統領は憶するところなく、「米国の最大の企業は教育事業である」と叫び、「1世紀前には米国は世界最大の教育輸入国であった。然るに現在は最大の教育輸出国である」と誇る。

(1965. 9. 25—相愛学園図書館長)

老化の心理

The Psychology of Aging

Prentice-Hall, Inc. 1964, 303pp

by James E. Birren, Ph. D.

橋 覚 勝

著者はその序言のなかで次のように告白している。「心理学的観点から、老化の過程について、全体としてできるだけ簡潔にかつあらゆる方面を網羅して叙述したもので、いわば発達心理学の一環としての成人の生活に関する心理学の教科書ともいうべきものである。専門的には勿論人生の老化過程とはいかなるものかを解明するところにあるが、それは所詮科学的な考察によって合理的に把握されたものでなければならぬとして、できるかぎり従来の研究結果を参照し引用して各章を構成した。新興科学の領域として、その具体的な資料は決して十分なものではないであろう。しかしかつては老人の生活に対する感傷やその生活価値の貧困から、科学的なアプローチはいずれかといえば敬遠されがちであったが、現在の社会情勢はかかる逃避や怠慢はゆるさなくなり、最近20年のあいだに、その科学的研究はめざましく発展した。いまそのあとをたどって本書を一応執筆した」ということである。

次に本書の内容について、各章別に摘記してみよう。

第1章 人生の時期の変容力理 (Dynamics of the Life Cycle) —— 年令段階によって、社会的役割の変化と不安定、感情発動の変化、発達の不可逆性、各種観点からの年令段階、人生時期のダイミックス、相貌表出の変化、個人差の消長、突発的変貌等々の諸概念をあげて、第2章以下の考察の展開を示唆し、結局人生は生活環境の変化に対する適応如何に依存するといふ。

第2章 老化の社会的、文化的決定因子 (The Social and Cultural Determinants of Aging) —— 老化の独立変数として経済的、社会的階層、民族性、人種性が論ぜられ、生命の長短や老人生活の類型はかかる因子にもとずくとして、アメリカ政府の医療保健統計、労働統計の結果を簡単に表示し、さらに Simmons の原始民族における老人の役割調査を引用している。

第3章 生物学的基礎 (Biological Influences) 老化および老年期の生物学的可能性を組織解剖学的に考察し、百才長寿の生物学的原理と由来をあきらかにしようとする。

第4章 各種感覚器管と知覚 (The Special Senses and Perception) —— 中枢神経系統ならびに末梢感覚受容器管の老性変化、その構造の特殊化そして神経興奮度の低下は感覚的受容を年とともに減退させる。従って知覚的弁別は、高年者においては、若年者にくらべて余りに強い刺激の場合は困難となり、かえって弱い刺激の場合に可能である。

第5章 動作の速度ならびに時間調整と発達および老化 (Speed and Timing in Development and Aging) —— 年とともに動作が遅延緩慢化するの当然であり、動作の事態如何によらないのは必至である。若年者の場合はその条件事態の如何によっておそくなる場合もあれば速くなる場合もある。従って高年者においては時間的に制限のある動作や作業は困難であるとして、著者自身の反応時間に関する実験的研究の結果を多く引用している。

第6章 動作の熟練 (Psychomotor Skill) —— 概に動作といっても、衣食住に関する動作、交通機関の運転動作、職業における動作、運動競技における動作といろいろな面があり、それらの差異によって熟練度の発達のピークに年令的差異がみとめられる。著者は Mc Farland, Welford, Lehman らの研究を引用し、運動競技の熟練のピークは22才乃至31才頃であるが、その他の種類の動作では、60才に達するもなおその減退をみないことを指示している。

第7章 学習 (Learning) —— 老化の影響は学習

能力そのものよりも、むしろ知覚、注意、動機づけさらに身体的状態にあらわれるという。なお動作の学習は、作業速度という点から、また過去の習慣という点から、順調にその効果のあらわれることをみとめることが困難であり、従って最近の産業界におけるオートメ化に対して、その適応や訓練はむづかしい。

第8章 思考と知能 (Thinking and Intelligence) ——知能検査の結果によれば、語彙、言語理解、計算などにおいては、若年者に比してすぐれているといわれるが、課題解決というような比較的抽象的な思考においては、高年者は奇想天外というような洞察によるよりも、過去の習慣的な貯蔵反応にうったえることが多いから、考え方に「硬さ」(rigid)があらわれることが多い。

第9章 就業、生産性および業績 (Employment, Productivity and Achievement) ——寿命革命とともに、人間の生産期間が延長することは必至で、退職年齢や退職後の生活についても考えなおす必要があるという問題、さらに技術革新の現時点ではさらに再教育、再訓練が是非とも必要であるというような問題があたりしく発生しつつある。とにかく生産高において、中高年層は若年層に比して劣るのはやむをえないが、質的方面ではまさるといことが実証せられている。なお専門的業績の年齢の推移については、Lehmanの 'Age and Achievement' から多くの事例を引いている。

第10章 パーソナリティーの老化(Personality and Aging) ——カリフォルニア大学の産業関係研究所 (Reichardら) およびシカゴ大学を中心とした研究グループ (Havighurst, Newgartenら) の成果を引用してパーソナリティーの老化は、退職による生活環境からの離脱による ego-energy の減退、そしてこれによる自己閉鎖、内膏、固定によって、生活興味や生活態度が変化するという点にもとづくものであろうと結論する。

第11章 老化、適応異常及び精神病 (Aging, Maladjustment and Psychopathology) 老人犯罪の特殊性として使いこみ、文書偽造、自殺などをあげ、これらは、生活行動の動機づけならびにコントロールの変化動揺に基因することを指摘している。さらに老人性痴呆に関して、脳髄の血液循環の低下減退を強調している。

第12章 回顧、諦観そして生命の終焉 (Life Review, Reconciliation and Termination) ——かつてHallがその著 Senescence (老年期) をかいたとき、その最後の章を The Psychology of Death (死の心理) として、その大著を完結したのと同じように、本章をかいたように思われるが、はたして Hall のその著書を紹介しかつ随所に引用している。Hall が自分

の研究や見解を老年と死のうえにまとめようとしたのと同巧異曲であろう。

以上各章にわたって簡単に紹介したのであるが、実のところ、著者のいう教科書としては、アメリカにおいてさえや行文が難解なのではないかと思われる。もうすこしスラスラとかけなかつたかどうかという感が深い。尤もこれは日本の読者からの注文であるかも知れない。しかし行文のいたるところに、著者の篤実な学究的性格がうかがわれて感服のほかはない。

紹介者のわたくしは、すでに著者の研究室——ベセズダの国立衛生研究所内精神衛生研究所にある——を訪れたこともあり、また私宅も訪問し、さらに国際学会でも再三会っている。氏は寡黙真摯なイギリス風紳士であり、学究者である。序言にかかれているように、若輩の同僚に本書に対する助言や訂正をもとめているところからも、氏の風貌性格を髣髴させることができ、ほんとうになつかしいしかもうらやましい気がする。

(1965. 9. 7)

飯田正一

「歌集レンバン島」

田中重太郎

別項消息欄にしろされたやうに、本学国文科では、最近二十二鉄玄教授をうしなつた。教授は、歌人丹草二として、つとに水壘派で活躍せられ、本学卒業生、在学生にながく短歌の指導をせられ、歌人として、教育者として、大きな功績をあげられた方である。

最近いただいた数冊の歌集のうち、本学ならびに二十二教授にゆかりのある飯田正一講師の「歌集レンバン島」を特に選んで、ここに紹介し、二十二教授を悼むところの一端を表したいと思ふ。学術誌であるこの研究論集に歌集の紹介をすることの非常識はよくわかつてゐるが、このたびは、歌人丹草二先生を偲ぶことのためとして、また国文科在学生の歌心を養ふしをりとして、この非礼をゆるしていただきたい。

本書は追憶の気持の強い歌集であつて、戦時色や国粹色があり、いまの若い女性にはやや理解し難い点もあらうが、これも二十二先生へのたむけの文としてゆるされたく、ときの流れと人間性を考へるたふとい資料として、その作品を味はつてほしい。その作品には、不易の人間性が感じられるはずである。

飯田正一氏は、昭和9年以來関西大学教授であられるとともに、本学国文科の講師として昭和25年4月短